**２０１９．２．２１．**

**花札の図柄**

**吉田　洋一**

**1月：松に鶴：新年にふさわしい縁起の良い組み合わせ**

**＜沿革＞**当初は2本の松の枝振りの姿と、前を向いた丹頂鶴が描かれていた。

**・門松**：大和本草には「久しく寿を保つ木なり」とある。**新年**に**松**を持ち帰る**小松引き**は**平**

**安時代**に始まる。**室町時**から神様を迎え入れる依り代として**門松を**立てるようになった。

**・能舞台**には背景として**松**が必ず描かれる（**松羽目・まつばめ**）

**・マツ**：日本では海岸に多い**クロマツ**、山に多い**アカマツ**が身近で二葉松であるが、五葉の

**ヒメコマツ**や**チョウセンゴヨウ**もある。　アメリカ大陸を中心に分布する三葉の**テーダ**

**マツ**や**ダイオウマツ**などもある。

**・ツル**：日本では釧路湿原一帯に**留鳥**として生息する**タンチョウ**のほか、山口県や鹿児島県

　などに**冬鳥**として渡来する**ナベツル、マナツル**などが知られている。

**・「鶴は千年亀は万年」**：鶴の実際の**寿命**は動物園では50～80年で、野生では30年位と推

定されている。

**2月：梅に鶯：新春の組み合わせの定番　＊(江戸の浄瑠璃「お染久松」)**

**＜沿革＞**当初は3分咲きの紅梅と白梅が描かれ、紅梅の枝に鶯がやや下向きに描かれていた。

**・ウメ**：日本には大陸から弥生時代には渡来しており、**奈良時代**には「**花見**」は**梅**が主体

で、京都の**御所**でも**平安前期**（850頃まで）は**左近の梅**が植えられていた。**万葉集**では**桜**

の42首に対して129首詠まれている。

**・ウグイス**：**梅の木**に**ウグイス**が止まることは殆どない。**花札**の小鳥は羽根が「**うぐいす色**」

の**メジロ**のように見える。**ウグイス**は藪や茂みに暮らし、クモや虫を食べている。**メジロ**

は**ウメ**や**ツバキ**などの花の蜜を吸って生きているから**梅の木**によくやってくる。

**３月：桜に幕：「花見」といえば桜**

**＜沿革＞**当初は白い桜に赤い若葉の山桜に多色の幔幕が描かれていた。

**・サクラ**：**平安時代**に入って，**野生の桜**を園地に移植して鑑賞するようになった。**花見**の

　風習は，**9世紀前半**に**嵯峨天皇**が南殿に**桜**を植えて，**宴を催**したのが最初と言われている。

・**サクラの日本原種：エドヒガン、オオシマザクラ、ヤマザクラ、カンヒザクラ、マメザ**

**クラ、チョウジザクラ、タカネザクラ、ミヤマザクラ**などが認められている。

・**「サクラを使う」**：**サクラ**は変異や交雑種が多く、100種以上もあり見分けが難しいことか

ら、露天商人などが仲間を客に仕立てて使うのをいう。

**４月：藤に杜鵑：藤の花咲き、ホトトギスが渡来**

**＜沿革＞**当初は白花の藤に杜鵑

**・フジ**：**ノダフジ**は右巻き（上からみて時計まわり）**ヤマフジ**は左巻き。**万葉集**では27首

詠まれている。「**藤波**の咲ゆく見れば**ほととぎす**　なくべき時に近づけにけり」**大伴家持**

**・ホトトギス**：カッコウの仲間で、インド・中国南部で越冬し、**5月中頃**に日本に渡来する。

　自分で子を育てず、ウグイスなどに**托卵**する習性をもつ。**杜鵑、杜宇、蜀魂、不如帰、**

**時鳥、子規、田鵑**など、漢字表記や異名が多い。

オスの鳴き声はけたたましく「ホ・ト・ト・・・ギス」「東京特許許可局」「テッペンカケ

タカ」が知られる。**万葉集**では153首詠まれている。

・「なかぬなら殺してしまへ**時鳥**」　「鳴かずともなかして見せふ**杜鵑**」　「なかぬなら鳴まで待よ

**郭公**」　「鳴かぬなら それもまた良し **ホトトギス**」

**5月：菖蒲(アヤメ)に八橋：本来、杜若（カキツバタ）に八橋だが・・・**

**＜沿革＞**当初より杜若に八橋。

**・アヤメ**：草地に自生し、**ノハナショウブ**や**カキツバタ**のように湿地に生えることは殆ど

　ない。古くはサトイモ科の**ショウブ**を指し、現在の**アヤメ**は「**花アヤメ**」と呼ばれた。

**明治中期**に新潟で発行の「温故の栞」では「**杜若に八橋」**となっている。現在は**ハナショ**

**ウブやカキツバタもアヤメと呼ぶ**習慣が一般的に広まっている。

**・八橋**：湿地などに渡した折れ折れに継渡した橋。「**伊勢物語**」で知られる杜若**の名所**

（愛知県・知立市）でもある。「**か**らころも　**き**つつなれにし　**つ**ましあれば　**は**るばるき

ぬる　**た**びをしぞおもふ」**在原業平・**伊勢物語

**6月：牡丹に蝶：百花の王・牡丹に戯れる蝶**

**＜沿革＞**当初は赤牡丹と白牡丹に白い蝶が２羽描かれていた。

**・ボタン**：原産地は中国西北部で、**唐の玄宗帝**の頃から愛されるようになり、「**百花の王**」

として愛好されるようになった。

**・胡蝶の舞**：舞楽や歌舞伎では**蝶**を**胡蝶**と呼ぶ。**歌舞伎の連獅子や鏡獅子**の中で、**胡蝶**は

**牡丹の花**に戯れる形で登場する。

**・「唐獅子牡丹」**：**百獣の王**と**百花の王**の取り合わせで、強い男と美しい女の象徴

**7月：萩に猪：優しげで美しい萩と野生で荒々しい猪の取り合わせ**

**＜沿革＞**当初は白萩にうずくまる猪の半身が描かれていた。

**・ハギ**：**萩**は**「**[**艸**](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8D%89%E5%86%A0)**+秋**」という和製漢字で、「**はぎ**」は国訓。　**生芽（はえぎ）、芽子**とも当てる。中国

の漢字の**萩**は**ヨモギ類**を表す。　**万葉集**で最も多く詠まれた花で142首が数えられる。　古来、

**萩**は**臥猪**(ふすど)の床として知られ、凶暴な**猪**も寝床にして身を休めるとされた。

**・イノシシ**：大和言葉では「**イ**（ウィ）」と呼び、「**イ（猪）のシシ（肉）**」が語源。　「ニク（肉）」は呉音。

**8月：芒(ススキ)に月／雁：秋の定番ススキに月と雁**

**＜沿革＞**当初は平地に茂った数本の芒に金色の満月が描かれていたが、武蔵野、八八では芒

が山状に纏めて描かれ、八八では山と背後の真っ赤な夜空に月が浮かぶ景色となった。

**・ススキ**：**薄**とも書く。**尾花**とも**茅・萱**ともいう。古くから屋根葺材として使用された。

　刈り取った**茅**を**刈茅**（かるかや）と呼び、葺いた屋根を茅葺屋根と呼んだ。なお**萱**は

　中国では**ワスレグサ（カンゾウ・ノカンゾウ）**を意味する。

**・茅の輪**：６月と１２月の晦日に行なわれる**大祓（おおはらえ）の行事**に使用され、くぐる

ことにより、半年間の罪穢（つみけがれ）を祓うことができるといわれる。６月を**夏越（名**

**越）の祓**、１２月を**年越しの祓**という。（「**蘇民将来**」神話に由来）

**・雁の編隊飛行**：大型の鳥が飛ぶと翼の先端から後方に乱気流が発生し、斜め後方には上向

きの気流が生ずるため、後を飛ぶ鳥はエネルギーの消費が少なくてすむため**Ⅴ字型の編隊**

が組まれる。先端を飛ぶ鳥は消耗が大きく疲れるため、時々後ろの鳥と交代する。先端の

鳥はリーダーではない。

**9月：菊に杯：重陽の節句には菊酒で一杯**

**＜沿革＞**当初は白・黄・赤の菊に寿の文字が記された酒杯が描かれた。

**・キク**：平安時代には陰暦９月を**菊月**と呼んだ。９月９日の**重用節句**を「**菊の節句**」とし、

**菊花酒**を飲む「**菊花の宴**」で邪気を払い、長命を祈った。**野菊**は日本に多種自生するが、

**鑑賞菊（イエギク）**は奈良時代に中国から渡来したとされる。**万葉集**には詠まれていない。

**・菊の御紋**：鎌倉時代、後鳥羽上皇がことのほか**菊**を好み、その後**十六弁八重表菊**が**皇室の**

**紋章**として定着した。

**・菊の献花**：日本では黄泉の国神話の影響もあり、**仏花や献花**として用いられてきた。

世界的にも中国、韓国で**葬儀の際**に使われることが多く、ヨーロッパでもフランス、

ポーランド、など一部の国で**白菊**が**墓参**に用いられている。**キク**は**短日性植物**で、切り花

として温室での電照栽培で周年出荷されている。

**10月：紅葉に鹿：「奥山に紅葉踏み分けなく鹿の・・・」猿丸太夫　（「お染久松」）**

**＜沿革＞**当初は楓の枝の紅葉と鹿の足元の散り紅葉が描かれていた。

**・モミジ**：「**もみつ**（紅葉する）」から転じた言葉で、元来**紅葉・黄葉**するものを指したが、

**カエデ類**がその代表として、**モミジ**と呼ばれるようになった。

**・紅葉はアントシアン**、**黄葉はカロテノイド**の色素による。

**・十月の鹿＝＞シカト：**花札の横を向いた鹿から、「**無視する**」の意となった。

**11月：柳に小野道風／燕：時雨の柳に飛びつく蛙に見入る東風（柳も燕も春の季語）**

**＜沿革＞**当初は**早春**の**若葉のシダレヤナギ**に**奴**が**春雨**の中、傘をすぼめて走る姿が描かれて

いた。**武蔵野**から**燕**が極楽鳥風になり、**八八**からは**時雨**の中で蛙の跳躍を眺める**小野道風**

が描かれるようになった。

**・ヤナギ**：日本では**シダレヤナギ**が代表的で、細長い葉が連想されるが、円形、楕円形のも

　のも多い。また水辺に生育する種類が多いが、山地に生育する者も多い。種子は**柳絮**と

　呼ばれ綿毛を持って風に飛ぶ。日本では綿毛が目立たない種が多いが、中国では５月頃の

　風物詩として漢詩によく詠まれてきた。

**・小野道風**：平安前期の能書家で**藤原佐理、藤原行成**と共に**三筆**と称された。花札では

**道風**が雨の中、**柳**に飛びつく光景を見て悟り、努力を重ねたとの故事が**柳**に重ねられた。

**・ツバメ**：日本で繁殖した**ツバメ**は台湾を経由して、フィリピン・マレーシアで越冬する。

　空中を飛んでいる虫を餌にしており、稲作の害虫を食べてくれ大事な鳥だった。雷や火事

　を防いでくれる生き物と信じられ、大切にされた。

**12月：桐に鳳凰：「ピンからキリ」の桐に止まる鳳凰　(「お染久松」)**

**＜沿革＞**当初、**桐**は**初夏**の図とされていた。

**・キリ**：**「ピンからキリ」**に因んで12月に入れられた。**ピン**は点を意味するポルトガル語

　に由来し、**カルタの１**に転じ、**キリ（切り）**は**カルタ**の12枚目**最終**を意味する。「**最初**

**から最後まで**」の意味だが、「**最上から最低まで**」の意味もある。「**これっきり**」の**桐**との

　説もある。

**・桐紋**：**桐**は古くから**鳳凰**の止まる木として神聖視され、（中国では**鳳凰**は**梧桐（アオギリ）**

に止まるとされている）**五七の桐**は嵯峨天皇の頃から用いられ、**菊の御紋**に次ぐ高貴な紋

章とされた。武家社会では天下人が望んだ家紋として、**足利尊氏や豊臣秀吉**が天皇から賜

っている。現在でも**日本政府の紋章**として取り上げられ**菊花紋に準ずる国章**としてパスポ

ートなどに使われている。

**・鳳凰**：中国では**春秋時代**から瑞鳥として、**麒麟、亀、龍**と共に「**４霊**」とされた（**礼記**）。

**鳳凰**は**五行説**ができてから南と火を司る神とされ、**朱雀**とも呼ばれるようになった。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（了）

**＊浄瑠璃「お染久松」**：「**柳桜**に**松楓**、**梅に鶯　紅葉に鹿**。竹に雀や花に蝶。籬[ませ]の**八重**

**菊**　蔦かづら。**桐に鳳凰**　獅子に**牡丹**。扇ながし砂ながし　蟲づくし草づくし。」

**＜2月＞梅に鶯**

**浄瑠璃　「お染久松　袂の白しぼり」**の初演は1710年頃ですが下記のようなくだりがあり、「**梅**

**に鶯**」のほか「**紅葉に鹿**」、「**桐に鳳凰**」の花札の絵柄と一致する言い回しが既にできている。

柳櫻に松楓。**梅に鶯 紅葉に鹿。竹に雀や花に蝶**。籬（ませ）の八重菊蔦かづら。**桐に鳳凰 獅子**

**に牡丹**扇ながし砂ながし蟲づくし草づくし。

**＜４月＞フジとホトトギス**

**・藤のつく苗字**：佐藤、伊藤、斎藤、加藤、後藤、近藤、（藤田）､遠藤、（藤井）、（藤原）、工藤、安藤、（藤本）＜以上100番以内）内藤、須藤、武藤、新藤、新藤、神藤、春藤（　）以外が藤原氏出自の16　　　　　　　　藤といわれる。他に大分独特の江藤、衛藤、斉藤、権藤などがある。〇藤は北日本、東日本、東海に多く、藤〇は近畿、中国に多い。但し徳島、大阪は例外で〇藤が多い。

**ホトトギス**の異称のうち「杜宇」「蜀魂」「不如帰」は、中国の[故事](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%95%85%E4%BA%8B)や[伝説](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BC%9D%E8%AA%AC)にもとづく。長江流域に[蜀](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%9C%80)という傾いた国（秦以前にあった[古蜀](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%A4%E8%9C%80)）があり、そこに**杜宇**という男が現れ、農耕を指導して蜀を再興し帝王となり「望帝」と呼ばれた。後に、長江の氾濫を治めるのを得意とする男に帝位を譲り、望帝のほうは山中に隠棲した。望帝**杜宇**は死ぬと、その霊魂はホトトギスに[化身](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8C%96%E8%BA%AB)し、農耕を始める季節が来るとそれを民に告げるため、杜宇の化身のホトトギスは鋭く鳴くようになったと言う。また後に蜀が[秦](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A7%A6)によって滅ぼされてしまったことを知った杜宇の化身のホトトギスは嘆き悲しみ、「**不如帰去**」（帰り去くに如かず。　＝帰りたい）と鳴きながら血を吐いた、血を吐くまで鳴いた、などと言い、ホトトギスのくちばしが赤いのはその為という。

**＜７月＞**

**吉田兼好の徒然草第十四段**

**【和歌こそ なほをかしきものなれ。あやしの賤（しづ）・山がつ（山賊）の所作（しわざ）も、いひ出でつれば面白く、恐ろしき猪（い）のししも、「臥猪の床（ふすどのとこ）」といへば、やさしくなりぬ】**　**これはの原文です。**

この文章は寂蓮法師「歌のやうにいみじきものなし。ゐのししなどいふおそろしき物も、ふすゐの床などいひつれば、やさしきなり」（八雲御抄六）をふまえる。

古来、**萩＝臥猪の床（ふすいのとこ）**と知られていました。臥猪の床とは、猪の寝所のことで、凶暴な野生の獣も萩や萱を倒して寝床にして身を休めるという事です。 **そこから転じて【萩と臥猪】は（優しげで美しい物）と（野生で荒々しい物）の対比を表し、和歌などで調和のとれた情景として使われるようになりました。**

**＜８月＞ススキ**　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　**大祓の行事と茅の輪**　　　　　　　　　[701年](http://ja.wikipedia.org/wiki/701%E5%B9%B4)（[大宝](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E5%AE%9D_(%E6%97%A5%E6%9C%AC))元年）の[大宝律令](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E5%AE%9D%E5%BE%8B%E4%BB%A4)によって正式な[宮中](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%AE%E4%B8%AD)の[年中行事](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B9%B4%E4%B8%AD%E8%A1%8C%E4%BA%8B)に定められた。この日には、[朱雀門](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%B1%E9%9B%80%E9%96%80)前の広場に[親王](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A6%AA%E7%8E%8B)、[大臣](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E8%87%A3)（おおおみ）ほか[京](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%A6%96%E9%83%BD)（みやこ）にいる官僚が集って[大祓詞](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E7%A5%93%E8%A9%9E)を読み上げ、国民の罪や穢れを祓った。衣服を毎日洗濯する習慣や水などのない時代、半年に一度、雑菌の繁殖し易い夏を前に新しい物に替える事で疫病を予防する意味があった。

その後、百年ほどは盛大に行われた。そして[応仁の乱](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BF%9C%E4%BB%81%E3%81%AE%E4%B9%B1)の頃から行われなくなったが、[江戸時代](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%9F%E6%88%B8%E6%99%82%E4%BB%A3)（[1691年](http://ja.wikipedia.org/wiki/1691%E5%B9%B4)（[元禄](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%83%E7%A6%84)4年））に再開され、次第に広まった。

[1871年](http://ja.wikipedia.org/wiki/1871%E5%B9%B4)（[明治](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%8E%E6%B2%BB)4年）の[太政官](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%AA%E6%94%BF%E5%AE%98)布告にて明治新政府により「夏越神事」「六月祓」の称の禁止と「[大宝律令](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E5%AE%9D%E5%BE%8B%E4%BB%A4)」の「大祓」の旧儀の再興が命じられ[[2]](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E7%A5%93#cite_note-2)、全国の神社で行われるようになった。戦後には「夏越神事」「六月祓」の称も一部では復活し、現在に至る。『[釈日本紀](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%87%88%E6%97%A5%E6%9C%AC%E7%B4%80)』（[卜部兼方](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%9C%E9%83%A8%E5%85%BC%E6%96%B9)　[鎌倉時代](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%8E%8C%E5%80%89%E6%99%82%E4%BB%A3)中期）に引用された『[備後国風土記](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%82%99%E5%BE%8C%E5%9B%BD%E9%A2%A8%E5%9C%9F%E8%A8%98)』[逸文](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%80%B8%E6%96%87)にある「[蘇民将来](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%98%87%E6%B0%91%E5%B0%86%E6%9D%A5)」神話

**茅の輪**の起源については、善行をした**蘇民将来（そみんしょうらい）**が武塔神（むとうのかみ）（素盞鳴尊すさのおのみこと）から「もしも疫病が流行したら、茅の輪を腰につけると免れる」といわれ、そのとおりにしたところ、疫病から免れることができたという故事に基づきます。

**蘇民蘇民将来の起源**　　将来についても、何に由来した神は不明であるものの、災厄避けの神としての信仰は[平安時代](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B9%B3%E5%AE%89%E6%99%82%E4%BB%A3)にまでさかのぼり、各地でスサノオとのつながりで伝承され、信仰対象となってきた

**＜９月＞キク**

菊は、日照時間が短くなると[花芽](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8A%B1%E8%8A%BD)を形成し、やがて[蕾](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%95%BE)となり開花するという性質がある。その性質を利用し、花芽が形成される前に人工的に光をあてることにより、花芽の形成と開花時期を遅らせる方法が**電照菊**である。使用する菊は秋に開花する「秋菊」を使用することが多い。また、ビニールハウスで覆うことで太陽光を遮る方法も併用することで、様々な菊を様々な時期に開花、出荷を可能としてる。

**＜１０月＞モミジ**

### 紅葉の原理：葉の赤色は色素「[アントシアン](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%83%88%E3%82%B7%E3%82%A2%E3%83%B3)」に由来する。アントシアンは[春](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%A5)から[夏](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%8F)にかけての葉には存在せずに、[秋](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A7%8B)に葉に蓄積した[ブドウ糖](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%96%E3%83%89%E3%82%A6%E7%B3%96)や蔗糖と、[紫外線](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B4%AB%E5%A4%96%E7%B7%9A)の影響で発生する。

### 黄葉の原理：葉の黄色は色素「[カロテノイド](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%83%AD%E3%83%86%E3%83%8E%E3%82%A4%E3%83%89)」による。カロテノイド色素系の[キサントフィル](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%83%AD%E3%83%86%E3%83%8E%E3%82%A4%E3%83%89#.E4.B8.BB.E3.81.AA.E5.8C.96.E5.90.88.E7.89.A9)類は若葉の頃から葉に含まれるが、春から夏にかけては葉緑素の影響により視認はできない。秋に葉の葉緑素が分解することにより、目につくようになる。なお、キサントフィルも光合成によってできた糖から出発し、多くの化学変化を経てできたものである。

### 褐葉の原理：黄葉と同じ原理であるが、[タンニン](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BF%E3%83%B3%E3%83%8B%E3%83%B3)性の物質（主にカテコール系タンニン、クロロゲン酸）や、それが複雑に酸化重合した[フロバフェン](http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%95%E3%83%AD%E3%83%90%E3%83%95%E3%82%A7%E3%83%B3&action=edit&redlink=1)と総称される褐色物質の蓄積が目立つためとされる。

黄葉や褐葉の色素成分は、量の多少はあるがいずれも紅葉する葉にも含まれており、本来は紅葉するものが、アントシアンの生成が少なかったりすると褐葉になることがある

**＜１１月＞ヤナギ・小野の道風**

11月の花札は雨と呼ばれ、もともと歌舞伎の忠臣蔵に出てくる斧定九郎という番傘をさした盗賊が登場していたが、明治になりオノと猪に因む洒落から小野道風にすり替えられたという。

**斧定九郎**（おの-さだくろう）浄瑠璃(じょうるり),[歌舞伎](https://kotobank.jp/word/%E6%AD%8C%E8%88%9E%E4%BC%8E-825840)「[仮名手本忠臣蔵](https://kotobank.jp/word/%E4%BB%AE%E5%90%8D%E6%89%8B%E6%9C%AC%E5%BF%A0%E8%87%A3%E8%94%B5-1518200)」の[登場人物](https://kotobank.jp/word/%E7%99%BB%E5%A0%B4%E4%BA%BA%E7%89%A9-1376447)。  
盗賊。お軽が勘平のために身をうってつくった50両を,お軽の父[与市兵衛](https://kotobank.jp/word/%E4%B8%8E%E5%B8%82%E5%85%B5%E8%A1%9B-404346)を殺害してうばう。のちに[イノシシ](https://kotobank.jp/word/%E3%82%A4%E3%83%8E%E3%82%B7%E3%82%B7-1505530)とまちがえられ勘平に撃たれる。

**小野の道風**

実はこの絵は、**浄瑠璃の「小野道風青柳硯」**という話からとったものなのです。

　隠岐島に流罪になって没した小野篁の遺児である小野道風は、零落していたが、ある時に取り立てられて、現在は公家になっている。

　一方、公家の橘早成（逸勢）は、天下を覆そうとしており、道風を味方にしようとしたが、道風はそれを断り、むしろ早成の企てをを阻　止しようとする。そんなある日、東風が池の周りを散策していると、柳の枝に飛び付こうとしている蛙がいた。蛙は何度も失敗するが、段々と高く飛べるようになり、遂には柳に掴まってしまう。これを見た東風は、「蛙も、努力すると段々高く跳ぶようになる。早成の勢力も、今は弱いものであるが、そのままにすると、段々大きな勢力になるかもしれない。今のうちに、謀反の根を摘む必要がある。」と考えた。 小野東風は、この浄瑠璃では大力の持ち主であり、早成のかかえる力士達をものともせずに撃退してしまい、謀反は鎮圧されます。

　ということで、元の話は教訓話とは、ほど遠い話だった訳ですが、日本人の教訓好きが、そのような話にしてしまったのでしょう。

  ところで、実際の橘逸勢は８４２年に死んでいて、小野道風が生まれたのは８９４年なので、二人の人生の重なりは全くなく、「小野道風青柳硯」は荒唐無稽な話であることが分かります。

**＜１２月＞キリ・鳳凰**

**鳳凰**が登場するのは、古代中国の**「鳳凰は聖王の出現を待って現れ、梧桐にのみ棲み、竹の実しか食べない」**という伝説に基づく吉祥紋からの連想とされている。  
もっとも**本来の伝説上で述べられる「梧桐」は「アオギリ」のことで、日本で一般的な桐とは科からして違う植物である。花は白または黄色。**  
この導入・混同はすでに平安時代には一般的になっていたようで、清少納言も「枕草子」の中で桐と鳳凰について記している。